

促成栽培向け 多収性で漬物にも向く単為結果性とげなしナス 「試交17-22」の栽培指針

品種育成の背景・ニーズ

愛知県の促成栽培ナス出荷量は6,820t（令和4年：全国第4位）であり、県内の農業生産にとってナスは重要な品目です。県内の主要品種である「とげなし輝楽」及び「千両」は、下の図のように漬物加工適性、収量性、単為結果性及びとげなし性の点で長所と短所がありました。そこで、それぞれの長所をいいとこどりした多収性で漬物にも向く単為結果性とげなしナス「試交17-22」を開発しました。「試交17-22」の導入により、産地の維持発展が期待できます。本指針では、促成栽培におけるポイントを説明します。



「試交17-22」

- 漬物加工適性
- 収量
- 単為結果性あり
- 「とげ」なし



「とげなし輝楽」

- × 漬物加工適性
- △ 収量
- 単為結果性あり
- 「とげ」なし



「千両」

(タネイ種苗株式会社製)

- 漬物加工適性
- 収量
- × 単為結果性なし
- × 「とげ」あり

品種の特性

- (1) 果皮が柔らかいため、一本漬けなどの漬物にも向いており、販売先を選びません。
- (2) 萌芽が旺盛で、多収性です。
- (3) ホルモン剤の処理や訪花昆虫がなくても着果し、省力化が可能です。
- (4) 果実のへた、葉、茎などいずれの部分にも「とげ」の発生はなく、農作業や調理が、「とげ」を気にせず快適にできます。
- (5) 果実は長卵形で、つやがあって揃いが良く、日焼け果など障害もほとんど発生しないため、秀品率が高まります。

栽培のポイント

台木

- ・土壌病害（青枯病、半枯病、半身萎凋病など）対策のため、台木を利用してください。

施肥

- ・下の表の果実1t生産当たりの養分吸収量(kg)を参考に施肥してください。

例. 目標収量10a当たり25tの場合の窒素施肥量（基肥+追肥）

$$25t（目標数量） \times 2.6kg（果実1t生産当たりの養分吸収量） = 65kg/10a$$

- ・側枝の萌芽が旺盛なため、地上部の様子を常に観察し、葉の黄化、莖径が細くなる、着果数の増加、花色が淡くなるなど着果負担がかかっている様子が見られたら、遅れないように追肥してください。

試験結果

表 果実1t生産当たり養分吸収量(kg)

品種	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	MgO
試交 17-22	2.6	1.4	4.4	3.3	0.4
とげなし輝楽	2.7	1.3	4.7	3.4	0.4

果実1t生産当たり養分吸収量は「とげなし輝楽」と同等であった

定植後の管理

- ・定植後から10月末までのハウス内が高温になる時期は、単為結果性が不安定になることがあるため、ホルモン剤の処理をしてください。

「試交17-22」栽培上の注意点

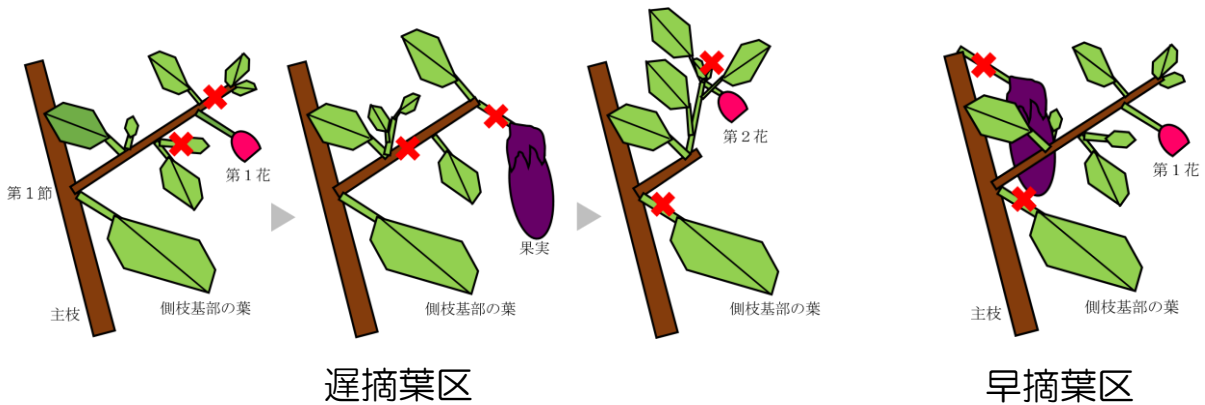
- ・「試交17-22」は「千両」や「とげなし輝楽」と比較して小葉ですので、光合成量を確保するため、葉を多めに残す必要があります。次頁の[摘葉方法](#)を参考に、摘葉してください。
- ・暖候期に着果過多によるつや無し果などの規格外果が発生しやすいです。次頁の[整枝方法](#)や[かん水方法](#)を参考に管理をしてください。
- ・萌芽が旺盛で芽の整理が必要です。特に3月以降の暖候期を迎える前に余分な側枝は切除してください。
- ・灰色かび病感染防止のため、花卉の除去を積極的に行ってください。

摘葉方法

- 親葉は極力残してください。ただし、黄化など老化した葉は摘みとってください。
- 側枝基部の葉は、残した芽の花が開花するまで残してください。

試験結果

摘葉方法（試験区の設定）



（第1節一次側枝第1果収穫切り戻し後、側枝第2花開花時に、側枝基部の葉を摘む
その後、10日毎に、下から一次側枝基部の葉を摘む）

（主枝の果実収穫時にその下部の一次側枝基部の葉を摘む）

表 摘葉の早晚が収穫までの日数に及ぼす影響

試験区	一次側枝開花から 一次側枝収穫まで	一次側枝開花から 二次側枝収穫まで
遅摘葉区	短い	短い
早摘葉区	長い	長い

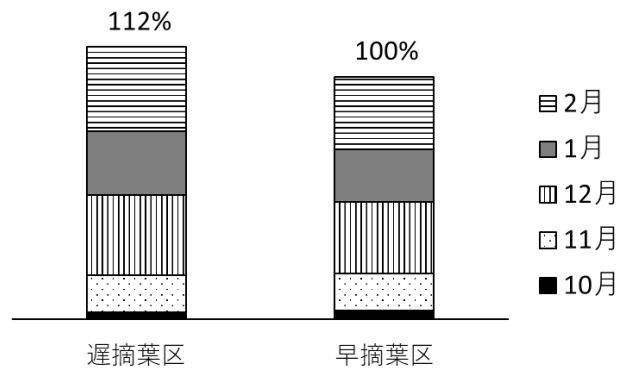


図 摘葉の早晚が可販果収量に及ぼす影響

遅摘葉区が早摘葉区と比較して、開花から収穫までの生育が早い傾向があり、可販果収量が多かった

整枝方法

- 2月以降は1芽を残して切り戻すことを徹底すると、つや無し果などの規格外果の発生が少なくなります。

試験結果

整枝方法（試験区の設定）

- 1芽・1芽切戻区：収穫開始から5月まで1芽を残して切り戻す
- 2芽・1芽切戻区：収穫開始から1月末までは2芽を残して切り戻し、2月から5月までは1芽を残して切り戻す
- 2芽・2芽切戻区：収穫開始から5月まで2芽を残して切り戻す

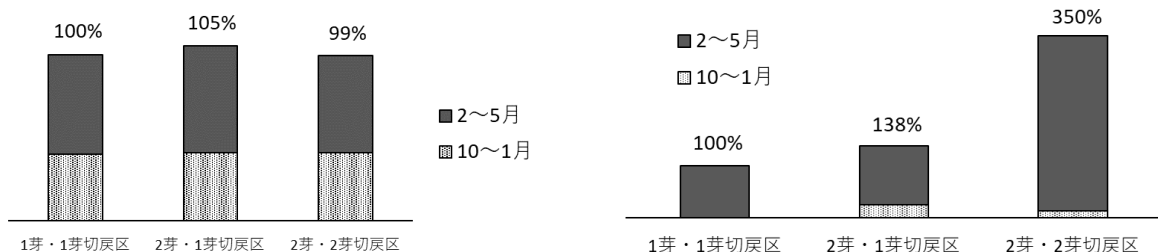


図 整枝方法が可販果収量に及ぼす影響

図 整枝方法が規格外果に及ぼす影響

2月以降、2芽切戻区は規格外果が多く発生したが、1芽切戻区は可販果収量を維持しつつ、規格外果の発生を抑制できた

かん水方法

- 少量多頻度でかん水を行うと、つや無し果や曲り果などの規格外果の発生が少なくなります。

試験結果

かん水方法（試験区の設定）

	単位	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
月当たりのかん水量	L/株・月	30	31	40	42	62	90	93
少量多頻度区	回数/月	60	62	62	84	124	180	186
	mL/株・回	500	500	650	500	500	500	500
多量少頻度区	回数/月	4	4	5	6	8	10	10
	mL/株・回	7,500	7,750	8,060	7,000	7,750	9,000	9,300

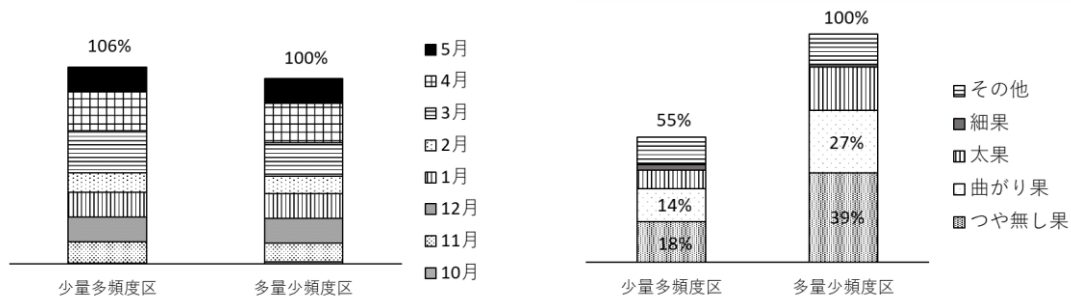


図 かん水頻度が可販果収量に及ぼす影響

図 かん水頻度が規格外果に及ぼす影響

問い合わせ先

愛知県農業総合試験場園芸研究部野菜研究室

愛知県長久手市岩作三ヶ峯1-1 電話：0561-41-8967

FAX：0561-63-0815